

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、17ページにわたって印刷してあります。
- 2 受検番号を、解答用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 3 答えは、全て解答用紙の決められた欄に記入しなさい。下書きは、問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 答えは、特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、答えの欄に、その記号を記入しなさい。また、答えに字数制限がある場合には、や。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 5 記号を書くときも、文字を書くときも、明確に書きなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを記入しなさい。
- 7 提出するのは、解答用紙だけです。

1 次各文の――を付けた漢字の読みがなを書きなさい。

- (1) 報酬の多寡によつては断らざるを得ない。
- (2) 過去五年にわたり生産量が漸増している。
- (3) 会心の一手で碁敵をあっと言わせる。
- (4) 与えられた使命を全うするために努力する。

2 次各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書きなさい。

- (1) 春になり解け残つた雪がカの子模様になっている。
- (2) ボクヨウケンの代わりにドローンを使う。
- (3) 春の空がホがらかに晴れ渡っている。
- (4) ようやくイツパシの職人として認められた。

3 次各問に答えなさい。

〔問1〕 次 ア・イ のそれぞれに漢字を一字ずつ入れると、例に挙げたように、熟語をつなげることができる。 ア・イ に当てはまる漢字を楷書で書きなさい。

〈例〉 安 定 ―― 定 休 ―― 休 養 ―― 養 成

〈問題〉 勘 ア ―― ア 護 ―― 護 イ ―― イ 星

〔問2〕「問」と同じ部首の漢字は次のうちではどれか。

ア 呈

イ 聞

ウ 聖

エ 閣

〔問3〕次の各文の――を付けた「だ」のうち、品詞が他の三つと異なっているのはどれか。

ア 小さな頃からの夢をかなえるためにあなたに必要なのは勇氣だ。

イ 窓ガラスを割ってしまったことを自ら名乗り出るなんて彼は正直だ。

ウ 商店街の福引きでハワイ旅行を見事に引き当てた母はラッキーだ。

エ 手を付けていなかった夏休みの宿題を一日で終わらせるのは無理だ。

〔問4〕次の各文の――を付けた慣用表現の使い方として適切なのはどれか。

ア アルコールは一日にビール一本までと肝に命じて日々過ごしている。

イ 彼は近年の日本映画界を代表する押しも押されぬスターである。

ウ 三か月前からしつかりと準備をしておけばよかったとほぞをかむ。

エ 彼女は絶体絶命のピンチを口先三寸でなんとかうまく切り抜けた。

〔問5〕次の各語を（ ）の中にひらがなで書いたとき、適切なのはどれか。

ア 大通り（おおどうり）

イ 地面（ぢめん）

ウ 扇（おおぎ）

エ 身近（みぢか）

〔問6〕次の書き下し文を読んで、ここから生まれた故事成語の意味として適切なのは次のうちではどれか。（*印の付いている

言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

孫子^{そんしけい}荊^{わか}、年少^{ねんしょう}き時^{*}、隠れんと欲す。王武子^{おうぶし}に語るに、当に石に枕し流れに漱^{すす}がんとすべきに、誤りて曰はく、「石に漱ぎ流

れに枕す。」王曰はく、「流れは枕すべく、石は漱ぐべきか。」と。孫曰はく、「流れに枕する所以は、其の耳を洗はんと欲すればなり。石に漱ぐ所以は、其の齒を礪かんと欲すればなり。」と。

〔注〕隠れん——隠居しよう

漱がん——ゆすごう

ア 昔は通用した方法を、時代や状況が変化しても続けること。

イ 言い間違いを訂正しないで、無理矢理にこじつけること。

ウ 前の失敗に懲りて、本来は必要でない心配をすること。

エ 目上の人の機嫌を損ねて怒りを買う、激しく叱られること。

次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

嫁入りの日は、暑かった。

家で白無垢*しろむくに着替えた。帯には、母が絹糸*ひしぎで菱刺し*ひしぎをしてくれていた。出戻らないという意味がある矢羽根柄だ。動くときキラキラと輝く。

親戚や近所の人たちにごちそうをふるまっていると、昼前に婚家から嫁迎えの人たちがお酒を手によつてきた。当時は、婿の家で式を挙げるのが一般的だったのだ。彼らは、婚家に嫁入り道具も運んでくれる。

和簞笥*わだんす、洋簞笥、整理簞笥、鏡台。この辺りでは女の子が生まれると、桐*きりの木を植え、それで嫁入り簞笥を作るのが慣習で、よりの嫁入り道具もそのように調えた。

次々トラックに積み込み、最後に積まれた物を見て、より子は驚いた。

洗濯機である。ローラーに洗濯物をはさんで、ハンドルを回すと脱水された洗濯物がのしかみたいに出てくるのだ。こんな物を買った覚えはない。

それもそのはず、父がこっそり用意した物だった。

父は炭焼きをやっていたからいつも真っ黒なのだ。焼き上げた炭を萱*かやで編んだ「炭すご」に詰めて、馬*うまに括りつけ里に下ろしていた。

年頃になったより子は真っ黒な父が恥ずかしかった。

学校の終業時間と仕事終わりが重なると、空っぽになった馬を引いて、学校に寄ってくれることがある。父も馬も真っ黒いままだ。校門の前に立つ父を見留めると、より子は「ひええ」と小さな悲鳴を上げてこっそり帰っていた。

父は置き去りにされたのを分かっていたのかいないのか、帰宅すると「*おろ、より子は先に帰ってらったのか」と目を丸くする。おっぴろげた鼻の穴も真っ黒だ。

ある時、こそこそすることが理不尽に思えた。父が真っ黒に汚れているから自分はこそこそと帰らねばならないのだ、と憤る。
「*ダダはいつも汚ねくてしょしい」と罵った。しょしいというのは、恥ずかしい、という意味だ。

その時の父の顔をより子は忘れられない。深く傷ついた顔なのに、眉をハの字にして、情けないような笑みを懸命に浮かべていた。まずいことを言ってしまったとより子はヒヤリとしたが、謝れなかった。

そういうことがあった上での洗濯機なのだろう。亭主に恥ずかしい思いをさせないために。

それが分かつてても礼を伝えられないままに、洗濯機は運ばれていった。

嫁入り道具がすべて運び出されると、玄関先で盃さかずきを交わす。それがすむと、花嫁と両親、弟の亘わた以下関係者たちは待っているハイヤーに分乗するのがしきたりだ。

しかし父は、あとから行くと告げて家の前にポツンと残っていた。

(1) 怪訝けげんに思ったより子が視線を母に転ずると、母は物言いた気な顔つきをしている。

聞き出したところ、自分は真っ黒でみつともない。だから一緒には行けない。あとから馬で行く、と決めていたそうなのだ。より子は発車しかけていたハイヤーから降りた。

夏の強い日差しの中に立つ父の輪郭は、何とも曖昧だった。足元の乾いた土にいびつな丸い影ができている。日が明るければ明るいほど、影は濃くなり存在感を増した。それはまるで、父の足元に深い穴があるように見えた。

玄関前に立つ紋付袴*もんつきはかまの父のもとへ行く。

「馬っこさ乗せてもらってもいい？」

より子の頼みに、父は目を丸くしたし、他の人たちも反対した。みつたぐね、と。

みつたぐない——。みつともない。ハイヤーがあるじゃないか。馬で嫁入りなど世間体が悪い。

より子は聞かなかった。

父は初めは戸惑っていたものの、白無垢姿で仁王立ちの娘の前にして、ついに折れた。

(2) 裏の馬小屋から座布団ざぶとんを括りつけた馬を引っ張ってきた父は、戸惑い顔から、はにかみ顔になっていた。

普段は父ともども黒く汚れ、網目状に乾いた泥をお腹や脚にくっつけていた馬は、すっかり磨き上げられていた。栗色の毛が艶々と天鵝絨ビロードのようだし、鬣たぐみはサラサラと揺れる。薄汚れている時は長い睫毛まつげの下ですまなそうに目を伏せていたが、今日は堂々と真まっ直すぐにより子を見つめていた。その瞳は澄み切り、純粹無垢だった。

父が、前に座るよう言う。実際子ども頃はそうしていたが、より子は父の後ろに横座りになった。

着物のため横座りにならざるを得ない今は、前に座ると自分の顔を見られるし父の顔も見なければならぬから。顔を見たら、道中、泣いてしまうかもしれないと思った。今生こんじょうの別れではないが、それでも籍から抜けるのである。そして、盆と正月くらいしか帰ってこれなくなるのだ。いや、それすらも無理かもしれない。近所に嫁いできた人も泣いていた。だから自分も父の顔を見たら、泣くかもしれない。そんなのはみつたぐない。だから、顔を見ることなく向こうまで行ける後ろがいい。

父は無理強かたいせずに、より子を後ろに乗せて馬の腹を踵かかとで軽く蹴った。

馬はグイッと一步を踏み出す。

より子は父の脇腹につかまる腕に力を込めた。

青い空をトンビが鳴きながら旋回している。⁽³⁾おかしみと悲しみが入り混じった鳴き声が青い空に染しみ渡っていく。

向かう先の山並みが、霞かすんで見える。

馬の歩みは力強く、ポクポクとのどかな音を立てる。揺れに身をゆだねる。

リング畑を貫く土の一本道は、乾いて白つちやけていた。丸太の電信柱は少し傾いている。リングの木はびっしりと葉っぱを茂らせ、その下にまだ青い実をたわわにぶら下げている。大きな実にするために、摘果が進められていた。風に乗って、桃の香りもしてくる。

畑と道の境には蚕こが養いのための桑の木が植わっている。小さなぶどうのような黒っぽい実がぎっしり生なっていた。学校帰りに友だちと競うように採って食べたものだ。紫色になった舌を見せ合ってよく笑った。甘みも酸味も強かった。

両脇の畑はリング畑から漆の木の畑に変わった。風がよく通るように間隔を空けて植えられた漆の木の畑も、秋になると真っ赤

に紅葉して美しいが、うっかり触って自分まで紅葉したかというくらい真つ赤にかぶれたこともあった。あの時は大変だった。臭くてえぐいドクダミ茶をしこたま飲まされたのだ。思い出して、ちよつと笑った。

背後から軽快なラッパの音がした。より子たちが路肩に寄ると、すぐそばをボンネットバスが走り抜けていった。乗客が注目している。より子は手を振った。客や車掌も手を振り返してくれた。その後^{*}にオート三輪^{*}が続く。ラッパを、拍子をつけて三回鳴らしていった。

日差しは強く、何もかもが日を照り返している。舞い上がった土埃^{ちちり}が眩^{まぶ}しい。中でも白無垢の自分自身が最も眩しかった。より子は歩んできた道を振り向いた。なだらかな名久井岳^{なくいだけ}が控えている。

生家がどんどん遠ざかる。

切なくなつて視線を落とした。

白い足袋に引つかかる白い草履が、揺れている。その下を、白つちやけた地面が流れていく。

「ダダ、馬つこは疲れねべか」

「こいつはあ丈夫だすけ、大丈夫だ」

「休まねくていんだべか」

「なーも、大丈夫だ」

「そうかあ……」

どんどん流れていく。

父の袴の裾から、下ばきがちらつと見えた。見覚えがある。

それはより子^{よりこ}が子どもの頃に刺した菱刺しだった。父にあげたものの、一度もはいているのを見たためし^しがなかったもの。当時は上出来だと思つていた縫い目は、今見るとガタガタ。

「やあねえ、なして今、それ、はいてらのよ」

照れくさくて嬉^{うれ}しくて、どういう顔をしていいのか決めかねる。やはり父の後ろに座つていてよかった。⁽⁴⁾

「この菱刺しはよお、おめがわらしの時に最初に刺したもんだ。特別な日^ひにはくべ、と決めてらつた」父が足を揺らす。馬が首を上下させた。首に下げた鈴が、いい音を出す。

「そつた前から？ 我まだ七つくらいだつたべ」

「おめの嫁入り道具の桐箆笥はもつと早えど。おめが生まれてすぐに桐ば植えたんだおん」

親というものはどこまで考えているのだろう。

父の背中は、思つたより大きくないことに気づく。どちらかと言えば小柄なほうだ。そんな父は、真つ黒になつてより子たちを養つてくれていた。自分はそんな父を、汚いだの恥ずかしいだのと批判してきたのである。

「ダダ、ごめんね」

やつと父に謝ることができた。

「何、謝ることがある」

「我、ダダさひどいこと言つてしまった」

父は深呼吸する。

「今日はめでてえ日だ。めでてえ日に『ごめん』は合わねえよ」

より子は頷く。

「ありがつとう、ダダ」

鼻をぐずぐずさせながら、震える声で言い替えた。やだあ、泣いでしたたじや。我みつたぐねえ、と思つた。

「泣ぐな泣ぐな。^{*} あもこさなる」

父の声がからかっている。からかいながらも、その声は震えている。

「ダダつてばひどい」

⁽⁵⁾より子は空を仰いで、あつはつはつはと大きな声で思い切り笑つた。

父越しの空に薄い雲がたなびいている。鮮やかな虹色だ。

「彩雲」というものだ。生まれて初めて見た。

より子は父の袖を引っ張つて、空を指す。

「ダダ、見で見で。あれえ雲がきれえだよ。天女の羽衣みてだごどお。いやあ、まんつきれえだよ」

父は顔を上げなかった。ぐつと俯うつむいてる。

雲はきつとすぐに消えてしまうと思った。見なきゃもつたいない。

「ダダ、ダダ」

⁽⁶⁾いくら呼びかけ、空を指しても、父は顔を上げない。馬の手綱を握る手が真っ白になっている。

より子は腕を下ろして父につかまり直した。父の脇腹は硬い。

「ダダ、今日はいいい日だね。こんなにきれいなものが見れたんだすけ。今日は、特別な日だあ」

豪農である大きな婚家の前で、新郎の諒二と家族、親類縁者がずらつと並んで待っていた。馬で来たより子たちを見て呆気に取られている。

おまけにより子の顔と言ったらそれはひどかった。

狐に化かされたみたいにぽかーんとしている面々がおかしくて、より子は大笑いした。ドロドロの顔で笑うのを目の当たりにした新郎の親類の子が、泣き出した。

かつて行商に来てくれていた姑となる人が草履の音をさせて小走りに駆け寄って、手巾で目元を押さえてくれる。^{*}

それから藍染の手甲を渡された。^{*}

「こつたにボロボロの物ばあげようかどうしようか迷ったんだもね。だどもこれが、今日のおめでたい日の始まりだったような気がするんだよ。だすけ、お前さんに持つていでほしいの。お前さんがこんまい時に熱心に作ってけだ物なんだもの。オラア、ほんとに嬉しかったんだあ」

そう涙ぐんで、より子の手に握らせて両手で包んでくれた。

後のことだが、子どもに泣かれた前代未聞の花嫁が馬で来たと噂になり、おかげでより子はすぐにご近所さんと打ち解けることができた。

父はより子を新郎に引き渡して、言った。

「あんたは幸せ者だ。娘ば頼む」

(高森美由紀『藍色ちくちく——魔女の菱刺し工房』による)

〔注〕 白無垢^{しろむく}——白色で統一した和装の花嫁衣装。

菱刺し^{ひしぎ}——青森県南部地方の伝統的な刺し子の技法で、布の目に細かく糸を刺して布を補強したり模様を描いたりするもの。

炭すご——萱で作った炭を収納する俵。

おろ——「おや」などと感嘆を表す青森県南部地方の方言。

ダダ——「お父さん」を意味する青森県南部地方の方言。

紋付袴^{もんつきはかま}——男性の第一礼装とされる家紋を付けた羽織と袴からなる和装のこと。

オート三輪——三輪のトラック。

名久井岳^{なくいだけ}——青森県南東部の山。

あもこさなる——「お化けになる」という意味を表す青森県南部地方の方言。

手巾——手ぬぐいやハンカチのこと。

手甲^{てっこう}——手首や手の甲までを覆うようにして装着する装身具。

〔問１〕⁽¹⁾ 怪訝^{けげん}に思ったより子が視線を母に転ずると、母は物言いた気な顔つきをしている。とあるが、ここでいう「怪訝に思った」

の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 父が慣例に従わないことを腹立たしく思ったということ。

イ 父が一人で家に残ることを嘆かわしく思ったということ。

ウ 父が置き去りにされることを心苦しく思ったということ。

エ 父が一緒に行かないことをいぶかしく思ったということ。

〔問2〕裏の馬小屋から座布団ざぶとんを括りつけた馬を引つ張つてきた父は、戸惑い顔から、はにかみ顔になっていた。とあるが、この表現から読み取れる「父」の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 以前は汚くて見た目が悪いと馬を嫌っていたのに急に馬で行きたいと言い出した娘に困惑したが、いつもは真つ黒な炭すごを括り付けている馬の背に花嫁衣装の娘を乗せざるを得ないので、気まずくて合わせる顔がないと感じている様子。

イ 黒く汚れた自分と一緒に行くのは嫌だろうと思っていたのに世間体も気にせず馬で行くと言う娘に困惑したが、この日のために美しく立派に整えた馬に白無垢の娘と一緒に乗せて行くことになり、心の内で嬉しく誇らしく思っている様子。

ウ 日頃会話も少なく自分には関心がなさそうだったのに父の望むように馬で行きたいと懇願する娘に困惑したが、急いで泥を落として何とか乗れるように用意でき、子どもの頃のように自分の前に座らせることが照れくさくて仕方のない様子。

エ 一人で馬に乗って行くと宣言していたのに自分も父と馬で行くと主張する娘に困惑したが、周囲に説得されて渋々馬を引き出すと既に馬を洗つて娘も乗れるように準備していたことが皆に知られてしまい、ばつが悪そうにしている様子。

〔問3〕⁽³⁾ おかしみと悲しみが入り混じった鳴き声が青い空に染み渡つていく。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 様々な声色を聞かせる鳥の声や頭上の晴れた空の色と共に遠くにぼんやりと見える故郷の山並みなど、郷愁を誘う情景を写實的に描き出している。

イ 縁起が良いというトンビの鳴き声が娘の結婚式を祝うかのように高らかに響き、思いが込み上げてきそうな父の心持ちを感動的に描き出している。

ウ 学校からの帰り道で漆の木に触れてひどい目に遭つて辛かった時の思い出すらも、今となつては笑えてしまう娘の心情を象徴的に描き出している。

エ のんびりとした田園風景の中を婚礼衣装の父と娘が馬に乗って行くという、滑稽な内にも哀愁が漂う嫁入り道中の雰囲気感を印象的に描き出している。

〔問4〕やはり父の後ろに座っていてよかった。とあるが、「より子」が「父の後ろに座っていてよかった」と思ったわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 生家から遠ざかっていく寂しさゆえに慣れ親しんだ光景から目を足下にそらしていたおかげで、幼い頃自分が作った菱刺しを父が身に付けていることに気付き、父の深い愛情を知ることができたから。

イ 横座りしていることで視界が広がり婚家までの道のりと美しい景色を楽しめる上に、馬の足が早くてぐんぐんと進んで行けたため振り落とされそうになっても、父にしっかりとつかまっていられるから。

ウ 嫁いだら二度と帰って来られずこれが永遠の別れになると思うと悲しくてたまらなくなり、近所に嫁いできた人と同じように泣いてしまったのだが、そんな不格好な姿を父に見られなくて済んだから。

エ 子どもの時にプレゼントしてから折に触れている下ばきの菱刺しが目に留まり、古びて縫い目がいびつになっているのに今でも使ってくれている父に、申し訳なくて顔向けができないと思つたから。

〔問5〕⁽⁵⁾より子は空を仰いで、あつはつはつはと大きな声で思い切り笑つた。とあるが、この表現から読み取れる「より子」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 見ばえの悪いことは避けなければならないと氣遣つていたにもかかわらず、涙で化粧の崩れた顔になってしまったことを自虐的に笑い飛ばしてしまいたいと思つている。

イ これまで胸につかえていた悔いを言葉にすることができて感極まった自分を、わざとおどけて受け止めた父の言いように大仰に応えてあえて明るくしようと思つている。

ウ 小さい頃からの思い出話を楽しんでいたところで父が子どもじみたことを言つて笑いをこらえているのを見て、あまりにもおかしくてもう我慢できないと思つている。

エ 長年にわたるすれ違いを経て今日というおめでたい日に素直に謝罪しているのに、面と向かつて取り合おうとしない父にはあきれて開いた口が塞がらないと思つている。

〔問6〕⁽⁶⁾ いくら呼びかけ、空を指しても、父は顔を上げない。とあるが、「父」が「顔を上げない」わけとして最も適切なのは、

次のうちではどれか。

ア 上を向いて空の様子を眺めていては馬を引く手元が注意散漫になって危ないのに、勝手気ままにはしゃいでいる娘にいら立ち聞こえない振りをしているから。

イ やつと本心で語り合えそうになったのに唐突に大笑いした上に雲を天女の羽衣みたいだなどと言うので、はぐらかされるものかとかたくなになっているから。

ウ 婿の家に無事に送り届けようと目の前の手綱に集中しながら自慢の娘を嫁がせる感慨をかみしめつつ、寂しさを押し殺して表に出すまいと我慢しているから。

エ 娘との別れが悲しくてたまらず嫁ぎ先には行かずにこのままどこかへ走り去ろうと考えを巡らせていることを、決して悟られないようにと警戒しているから。

5

次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

「行つて帰る」という構造は、「行く」と「帰る」という反対方向への運動を時間の枠組みでとらえたものです。主人公は住み慣れた場所の外に出て行くことで、予期せず何者かと出会い、思わぬ事件に遭遇し、試練をへて経験を重ね、そしてふたたび故郷へともどつてきます。言い換えれば、これは主体としての主人公の経験として物語をとらえた枠組みということができます。その意味で、この枠組みは近代に誕生した小説などを理解するときにも有効なものです。（第一段）

しかし、これをそのまま絵本に当てはめると、困ったことが起こります。それというのも絵本のなかでこの近代的な経験する主体としての主人公を見つけることが、それほど簡単なことではないからです。むしろ、多くの絵本では、「主人公」（本来の意味での主人公と区別するために、ここでは鍵括弧をつけておきます）は、意志をもった行為の主体でなく、どのような出来事に出会っても不思議なくらいその性格が変化したりしないのです。つまり絵本の「主人公」は、小説の主人公のような行為主体ではなく、そのため経験によつて成長などしないのです。（第二段）

その理由を、絵本は幼児向きの短い読み物だから、人の成長につきものの複雑な心理を描写する文章や入り組んだ筋を表現することができず、そのために主人公の経験を描くことができないのだと考えるかもしれません。つまり、絵本は人間の経験を描

くには不適当な表現媒体だという理解です。しかし、このような理解は小説のような大人のメディアを基準にした理解にすぎません。(第二段)

あるいはまた、絵本が昔話をもとに制作されているからであり、昔話では主人公は物語の媒介項にすぎないのと同様の理由によるものだと考えられるかもしれませんが。この考えは、絵本の「主人公」がなぜ小説の主人公のような行為主体でないのかを理解するためのヒントにはなりますが、なぜ昔話をもとにしていない創作絵本においても、小説のような主人公が登場しないかについて、うまく説明できるわけではありません。(第四段)

⁽¹⁾ 理由は絵本というメディア自体に内在しているのです。これから明らかになっていくことですが、絵本というメディアの特質の内部から見れば、もともと絵本はそのような主体としての主人公の経験を表現する媒体ではないのです。(第五段)

北欧の昔話に、『おなかのかわ』というものがあります。これは、ネコが会おう相手をつぎつぎと見境なく呑み込んでいくという、恐ろしくも不思議にユーモアのあるお話です。友だちのオウムの家に招待されて、だされたごちそうをたிரらげてしまったネコは、⁽²⁾ こともあろうにオウムを呑み込んでしまいます。そして、外に出たネコは、今度は出会ったおばあさんを呑み込み、さらに馬方とロバをも呑み込み、行列の先頭にいた王様にお后様とその兵隊たち、行列に参加していたたくさんさんのゾウたちまで、ぺろりぐくと丸呑みしてしまいます。最後に二匹のカニを呑み込むのですが、このカニたちがネコのおなかの皮を内側からカニバサミで切り開き、そのおかげで呑み込まれた者たちは、みんな無事にネコのおなかから脱出します。その後、ネコは自分のおなかの皮を一日かけて縫い合わせたというストーリーです。(第六段)

この『おなかのかわ』が絵本になった、瀬田貞二再話／村山知義絵の『おなかのかわ』を例にとってみましょう。絵本としてこの作品をとらえたとき、この絵本の主人公は誰なのでしょう。物語として言葉で表現されたときには、ネコを中心にして話が進みますし、ネコが主語になる「ネコはぺろりと○○を呑み込みました」といった文章がつづくために、一見するとネコが主人公のように思えます。しかし、本当にネコが主人公なのでしょうか。絵本としてみると、どうもこの絵本には正確な意味での主人公などいないようです。(第七段)

物語としてではなく、イラストレーションと物語とによって作られる世界として、この絵本世界を体験するとき、この絵本は主人公としてのネコが「行って帰る」絵本というよりは、人やら動物やらがネコの胃袋のなかにつぎつぎと呑み込まれ、呑み込まれた集合体がもうそれ以上耐えきれなくなり、その刹那に集合体が崩れて、元の状態にもどるダイナミックなプロセスを描いた絵本

のようにみえます。(第八段)

⁽³⁾ガブリエル・バンサンの『アンジュール ある犬の物語』のように文字のない絵本はあっても、絵のない絵本がないように、絵本をメディアの特質から理解するためには、イラストレーションによって空間が構成されていくプロセスにこそ着目する必要があります。「物語」からのアプローチを一度括弧に入れて、主人公という人間主義的な視点を外してしまっただろうでしょうか。そうすると、これまで物語のテーマから整理されてきた絵本群は、まったく異なった景色を示してくれます。(第九段)

絵本には、ただダイナミックな「空間構成のプロセス」だけが残ります。絵本では、人や動物たちが、つぎつぎと登場してきて、ど、ど、どと数が増えていつて、一列の行列になったり、重なうて塔のようになり、山のようになり、あるいは袋のなかに寄り添って入り込んだりします。さらに、ある出来事をさかいに急にカラストロフィー(破局・大団円)をむかえ、その人と動物たちの行列が、塔や山が、寄り集まった集合体が、一気に崩れたり爆発したりするように、空間構成における均衡と不均衡のダイナミックな運動のプロセスを、見ることでできるでしょう。つまり、主人公の経験としてとらえるという近代の小説を読む視点を括弧に入れ、人間主義的な時間の枠組みから、非人間的で即物的な空間の枠組みへと視点を転換させてしまうのです。(第十段)

もちろんこの空間の枠組みの視点においても、均衡から不均衡へ、そしてまたふたたび均衡へ、という運動のプロセスを含んでいますから、当然、時間の観点が含まれています。それは「行つて帰る」という構造のなかに、空間の移動がすでに入っているのと同じです。しかし、小説などとは異なり、絵本という視覚の側面が重要な要素をもつメディアを理解するために、あくまでも「空間構成のプロセス」の方に力点を置いてとらえてみたいのです。主人公という視点を括弧に入れて、「均衡回復」という抽象的で無機的な用語をあえて使用するのも、絵本世界に起こる出来事を、人間的な時間における経験としてではなく、力学的で即物的な「空間構成のプロセス」としてとらえるための工夫なのです。(第十一段)

このような観点から、あらためて絵本『おなかのかわ』を見直すと、この絵本は常識を超えたネコの恐るべき破壊力によって日常の秩序が崩れ、そしてまた予想外の小さき者の力によって秩序が回復される絵本、つまり不均衡の極限におけるカラストロフィーから均衡へといたる、均衡回復の絵本とみることができそうです。(第十二段)

ネコが会おう者を見境なく呑み込むことによつて、それまでの世界の均衡が崩れはじめ、クライマックスでカラストロフィーに転じ、おなかから呑み込まれた者たちが出て元の世界に復帰することによつて、世界の均衡が回復されます。しかし、このようないのちにかかわるような経験をへたにもかかわらず、登場人物たちはそのことによつて自己観や世界観が変容したり成長したりす

るわけではありません。この絵本世界では、時間の形態は、一方向に直進し新しい出来事によって世界が非可逆的に変化する歴史の時間というよりは、円を描くかのように話がはじまるまえの元の状態に帰ってしまう神話の時間に、近似しているのだといえます。(第十三段)

子どもは「行つて帰る」物語に安心感をもつといわれますが、それはどれほど驚くべきことや不思議なことに出会おうとも、元の世界にもどる(帰る)ことに理由があるからではないでしょうか。ネコに呑み込まれたものたちが、元の世界に生きてもどることなく、そのまま物語がエンディングを迎えたら、読者である子どもは不安に陥ってしまうかもしれません。子どもにとって重要なのは、「主人公」が元の場所に帰ってくるだけでなく、世界のバランスが元の状態にもどることなのです。ちょうどミステリーで、犯人が最後には捕まり、正義の天秤のバランスが回復されるようにです。(第十四段)

このように考えると、「行つて帰る」物語というのも、この均衡回復の物語の一つのタイプとして、とらえることができるように思います。行つて帰ってくる、失われたものが見つかる、贈与したものが巡り回ってもどってくる、呑み込まれた者たちが無事に元にもどる、喧嘩した相手と仲直りする、……。さらにこのように考えていくと、幼い子どもが喜ぶ絵本は、空間の構成のプロセスという観点からみれば、均衡回復型の絵本なのだと言い換えることができます。(第十五段)

もちろんこのような均衡回復には、完全に元の状態にもどる円環のものばかりではありません。むしろこれは極限の例で、多くの均衡回復型の絵本の元の状態への復帰は、より緩やかなものです。(第十六段)

(矢野智司・佐々木美砂『絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか』(一部改変)による)

〔問1〕理由⁽¹⁾は絵本というメディア自体に内在しているのです。とあるが、ここである「理由」とはどういうことか。本文中の語句を用いて、「こと」に続くように三十字以上三十五字以内でまとめて書きなさい。

〔問2〕⁽²⁾ 友だちのオウムの家に招待されて、だされたごちそうをたいらげてしまったネコは、こともあらうにオウムを呑み込んで

しまいます。とあるが、ここでいう「こともあらうに」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 頼もしいことに

イ 悲しいことに

ウ 驚いたことに

エ 不思議なことに

〔問3〕⁽³⁾ ガブリエル・バンサンの『アンジュール ある犬の物語』のように文字のない絵本はあっても、絵のない絵本がないように、

絵本をメディアの特質から理解するためには、イラストレーションによって空間が構成されていくプロセスにこそ着目する必要があります。とあるが、筆者が「イラストレーションによって空間が構成されていくプロセスにこそ着目する必要があります」と述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 多くの人々や動物がともに経験を積んでいく時間の流れという視点から絵本を捉えることで、絵本をメディアの特質から理解することができるから。

イ さまざまな体験を通して主人公がどのくらい移動するかという視点から絵本を捉えることで、絵本をメディアの特質から理解することができるから。

ウ 登場人物が劇的な結末に至るまでの一連のストーリーという視点から絵本を捉えることで、絵本をメディアの特質から理解することができるから。

エ 登場する人々や動物が絵の中でどのように描かれていくかという視点から絵本を捉えることで、絵本をメディアの特質から理解することができるから。

〔問4〕 この文章の構成における第十一段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた内容について、留意すべき点に言及した上で自説の妥当性を強調している。

イ それまでに述べてきた内容に基づいて、具体例を提示することで論旨を理解しやすくしている。

ウ それまでに述べてきた内容を打ち消して、新たな視点から改めて問題を捉え直そうと試みている。

エ それまでに述べてきた内容に対して、反対の立場から別の事例を示して話題の転換を図っている。

〔問5〕⁽⁴⁾

さらにこのように考えていくと、幼い子どもが喜ぶ絵本は、空間の構成のプロセスという観点からみれば、均衡回復型の絵本なのだと言い換えることができます。とあるが、「幼い子どもが喜ぶ絵本は、空間の構成のプロセスという観点からみれば、均衡回復型の絵本なのだ」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 幼い子どもが喜ぶのは、主人公が常識を超えた出来事に臆することなく立ち向かい、ついには遠く離れた故郷へと無事戻ってくる構造の絵本ということ。

イ 幼い子どもが喜ぶのは、「行つて帰る」という展開の物語というよりも、視覚的側面から見て最終的に初めの状態へと収束していく構造の絵本ということ。

ウ 幼い子どもが喜ぶのは、登場する人や動物がさまざまな事件と出会いそれを解決していく過程で、徐々に成長を重ねていくという構造の絵本ということ。

エ 幼い子どもが喜ぶのは、昔話のようにカタストロフィーが生じることがなく、怖い思いをせずに最後まで安心して読んでいる構造の絵本ということ。

〔問6〕

本文中に述べられている筆者の主張と一致するものを次のうちから二つ選びなさい。

ア 絵本はその構造上長い文章で説明することができず、登場人物の心情変化について十分に述べることができないため主人公の成長を描くことはできない。

イ 『おなかのかわ』に主人公はおらず、信じ難い事件が起きるものの最後には一度崩れてしまった秩序が元通りになるタイプの絵本と捉えることができる。

ウ 絵本は力学的で即物的な観点から捉えることが重要なのであり、その点に着目すれば絵本の類型の一つとして均衡回復型の絵本というものを見出せる。

エ 登場人物の活躍という点に注目してイラストレーションを見れば、絵本における時間構造は神話と同様に直線的で不可逆的な変化をするものと言える。